

SOGIに敏感な視点による家族研究に向けて —異性愛とシスジェンダーの脱普遍化—

大山治彦（四国学院大学）

1. 目的と結論

本報告の目的は、LGBTQ+が可視化された現在、家族社会学などの家族研究は、どのように変化するかを論ずることである。結論は、今後、家族研究が、ジェンダーとともに、SOGIに敏感な視点を取り入れることになるということである。LGBTQ+の可視化のインパクトは、家族研究のテーマにLGBTQ+に関する家族が加わり、その範囲を拡大させることにのみ留まるものではない。従来、普遍的な家族とみなされた家族が、シスジェンダーでヘテロセクシュアルな人たちに特有なものではないかという疑問を突きつけてくるのである。したがって、LGBTQ+の可視化による変化は、家族を研究する者すべてに影響するものであり、取り組むべき課題なのである。

2. SOGIに敏感な視点とは

SOGIに敏感な視点（SOGI-sensitive perspective か）、もしくはSOGIの視点とは、シスジェンダーと異性愛を個別特殊なセクシュアリティとして相対化し、ヘテロセクシズムやシスジェンダー主義（cisgenderismであろうか）を克服する視点である。そして、SOGIにおける平等（SOGI平等）の実現を目指す、価値的な概念である。なお、この2つの用語は、世界的に見ても、ほとんど使用されていないものである。SOGIに敏感な視点は、セクシュアリティに敏感な視点でもよいかもしいない。しかし、セクシュアリティは、性の多様な側面を包括する複雑で広い概念であり、分析のための概念としては使い難いであろう。そのため、まず焦点をあてるべきは、セクシュアリティのうちで、SOGIであると考え。また、SOGIに敏感な視点は、ジェンダーに敏感な視点に含まれるものであろう。しかし、現段階では、SOGIに敏感な視点は、別建てにして強調する必要がある。なぜなら、ジェンダー概念は、「ヘテロジェンダー」（heterogender）だとの指摘もあるように、ヘテロセクシズムやシスジェンダー主義というべきものが、現実的には内包されているからである。そして、SOGIに敏感な視点による家族研究は、LGBTQ+を視野に入れた家族研究、あるいはLGBTQ+フレンドリーな家族研究と同義ではない。シスジェンダーの異性カップルを標準、中心とし続ける、ヘテロセクシズムやシスジェンダー主義のもとでは、SOGIにおける権力関係に鈍感になりかねない。また、LGBTQ+に関してのみ有徴化し続ける限り、LGBTQ+は、標準とは異なるものとして、周縁化、あるいは“問題化”されてしまう。異性間の結婚が単に結婚と呼ばれる一方で、同性間の結婚のみが「同性婚」と言われているが、それに対してあまり疑問を持たれていないことも、その一例である。

3. 異性愛とシスジェンダーの脱普遍化と男性学

ヘテロセクシズムやシスジェンダー主義の克服には、異性愛とシスジェンダーを個別特殊なセクシュアリティとして、脱普遍化することが必要である。そのさいには、女性学によって男性が特殊個別なジェンダーとして相対化され、自己省察の学として男性学が存在するが、そのありようが、大いに参考になるであろう。

4. 見直しを迫られる家族研究のあり方

同性カップルやトランスジェンダー同士の結婚、同性カップルによる育児や子育て、トランスジェンダー男性による出産や子育てなどが、現実に行なわれていることを踏まえると、従来の家族研究において、自明とされていた概念や用語などの見直しは必須となる。また、国勢調査やNFRJなど研究の基礎となる調査も、SOGIに敏感な視点から、調査項目、解釈の仕方などの再検討も求められよう。このように考えると、家族研究のあり方そのものが変容を迫られるといえよう。SOGIに敏感な視点の構築や、異性愛とシスジェンダーの脱普遍化ためには、LGBTQ+が関わる家族についての研究の促進が必要となる。さらにいえば、SOGIに敏感な視点によって、“普通の家族”が相対化されることは、ステップファミリーや、生殖補助医療によって育児する家族なども周縁化されることのない家族研究に繋がるのではないかと思われる。

【付記】本報告は、日本学術振興会（JSPS）の科学研究費による研究のスピンオフである（26570018、15K01935、18H00937、18K11911）。また、2019年9月に開催された本学会第29回大会（於 神戸学院大学）における拙報告を大幅に修正したものである。

キーワード：SOGI、ヘテロセクシズム、シスジェンダー主義